

2026年度 入試問題分析シート

大阪大学

前期日程

科目

物 理

総 括

難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総 論〉

例年どおり大問3題が出題され、〔3〕はA、Bに分かれている。分野は〔1〕力学、〔2〕電磁気、〔3〕A 熱力学、B 光波であった。計算量は減少したが分量は昨年と変わらず、時間内に完答することは難しい。

〈特記事項・トピックス〉

〔2〕でホール効果を利用して地磁気を測定する問題、〔3〕の断熱曲線の傾きを利用して吸熱か放熱かを考える問題はユニークである。

〈合格への学習対策〉

難易度は例年より下がったが、やはり物理力に応じて大きく点差がつく。教科書の内容を全て理解した上で、まずは、標準的な入試問題を完璧に解けることが必要である。その上で、やや難レベルの問題が解ける学力を身につけておかなければならない。また、時間内に解けない問題を見抜く能力も必要である。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範 囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
〔1〕	記述	物理	力学, 電気 ・単振動 ・静電気力 ・エネルギー保存則	弾性力と重力, 静電気力を受けた小球の単振動の問題である。 静電気力を近似すると, 弾性力と類似した力になることを利用する。Ⅱの問8は, Ⅰとは振動の中心と角振動数が変化することに着目する。Ⅲは下のばねの長さが一定となることを用いるが, 類題をあまり見ることがなく, 難しい。	やや難
〔2〕	記述	物理	電磁気 ・半導体 ・ホール効果 ・オームの法則 ・地磁気	Ⅰはホール効果, Ⅱはオームの法則, Ⅲは地磁気を測定する問題である。 ⅠとⅡは標準的な問題である。ⅢはⅠの考え方を利用するが, 問10では冷静な判断が必要である。	やや易
〔3〕	記述	物理	A 熱力学 ・定積変化 ・熱力学第1法則 ・熱効率 B 光波 ・屈折の法則 ・レンズの公式	サイクルと熱効率の問題である。特に, p - V 図が右下がりの直線で表される状態変化に注目する。 問3は落ち着いて計算したい。問4は, 状態Cで題意の条件が成り立つことを用いる。 Ⅰは屈折の法則を利用した平凸レンズの焦点距離を考える問題, Ⅱはレンズの公式を利用する問題である。 Ⅰの問6は, 三角関数の公式を用いて落ち着いて計算したい。Ⅱは基本問題である。	標準 やや易

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。